

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2022



所 属： 人文学部人文学科キャリアイングリッシュ専攻

名 前： 山本 幹樹

作成日：2022 年 5 月 6 日

九州ルーテル学院大学 ティーチング・ポートフォリオ

教員氏名：山本幹樹

所属：人文学部 人文学科 キャリアイングリッシュ専攻

1. はじめに

2022 年度 4 月に九州ルーテル学院大学人文学部に着任し、主に本学の教養英語科目全般を担当している。専門はアメリカ文学で、特に 19 世紀女性作家について研究を行う。また、文学作品はその多くが映画化されており、映画の果たす役割を、映画文化、映画英語、英語教育の視点から研究を行っている。

2. 教育の責任

2022 年度は年間 13 科目担当予定である。

2.1. 授業科目の担当

2022 年度は以下の表の科目を担当(予定も含む)している。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
英語 I	2022 年度前期	43 名	共通教育
フレッシュマンゼミ	2022 年度前期	14 名	共通教育
Reading & Writing 演習Ⅲ	2022 年度前期	19 名	専門教育 週 2 回開講
基礎英文法	2022 年度前期	36 名	専門教育
ビジネスイングリッシュ I	2022 年度前期	18 名	専門教育
Reading & Writing 演習Ⅳ	2022 年度後期	21 名	専門教育 週 2 回開講
応用英文法	2022 年度後期	34 名	専門教育
ビジネスイングリッシュ II	2022 年度後期	21 名	専門教育
TOEIC テスト演習	2022 年度後期	16 名	
特別研究	通年	未定	専門教育 2022 年 9 月決定予定
卒業研究	通年	8 名	専門教育

■ 主要担当科目

Reading & Writing 演習Ⅲ・Ⅳ

本授業では、主に英語のリーディングとライティングの学習を中心にしながら、ライティング、スピーキングなどの活動も取り入れ、総合的な英語の力を培うことを目標としている。演習であるため、受講者の学習活動が中心となる。そこで自らテキストを探し、それについて内容を把握し、ディスカッションを行うという形式をとる。

ビジネスイングリッシュⅠ・Ⅱ

ビジネスの現場で使用頻度の高い英語を主に学習する。また、コミュニケーションは、どのような場面においても起こりうるので、毎回トピックを設定して、それに伴った会話を行っている。同時に語彙、リーディング、リスニング学習も行い、総合的な英語能力の向上に努める。

基礎英文法・応用英文法

英文法は、苦手と感じる学習者も多いが、彼ら自身も文法の重要性を認識している。また、教職に就くことを希望する学生には、教えるという点も習得が不可欠である。そこで、毎回の授業では、担当を決め、作家、俳優、アスリートなどが残した印象に残るような例文を、文法項目に沿って探す活動を行う。自身にとって「忘れられない例文」が一つでもあれば、その文法項目を習得するのは容易になるだろう。

学部での教育以外の教育実践は以下のようなものがある。

■ 非常勤講師

なし（2022年5月時点）

2.2. 教育組織運営

FD・SD 委員会に所属し、研修の実施、受講を行う。また、相談員を務める。

3. 教育の理念

入学試験受験経験者は、単一的な正答を直ちに求める傾向があるが、物事の問いに対する答えは一つに限定されるものではない。あるいは回答者それぞれの立場で違ってくるかもしれないという多面的な考え方が不足しがちな傾向にある。そこで、テキストを時間をかけて読み込み、時には味わい、些細でも疑問点を大切にしながら問題解決に向けた取り組みを行う。

3.1. 理念1 課題の設定、問題解決の機会

語学学習は授業内外において、学習者の学習活動が中心であり重要となる。そのため、モチベーションを維持しながら個々が継続して学習活動を行うには学習者自らが到達度を把握し、目標や課題の設定を行うことが重要と考える。また、クラスメイトとの学習や交流もモチベーションを高める要因となると考えグループワークを積極的に行う。

3.2. 理念2 深く読み込み、自らの意見を培う

早さを求められがちな昨今、文章を深く読む活動が減少傾向にあるように感じられる。そうした中で、英文の意味を読み込み、考え、また自分に照らし合わせて文章を綴るといった活動は重要であると考え。

3.3. 理念3 情報活用能力の育成

ICTの活用は方法次第で、理解をより深め、また次の課題に取り組むきっかけを与えてくれる。ICT機器に慣れるだけでなく、それ以上の活用方法を受講者とともに探りながら、教育に活かしていく。

4. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

4.1. 現時点での自身の到達点を知り、そこからどのような目標をもって取り組むかを個々に設定させている。教員自身が個々の到達度を把握しながら、それぞれに合った方法を提案することもしている。また、受講者同士で課題を出し合うなど、学習者の目線で取り組めるような活動を行う。

4.2.

学習者に合ったテキストの在りかは、学習者自身が知ると考える。具体的には、興味のあるテーマをもとに英文テキストを探し、読んで内容を理解したのち、自ら問題提起を行い、それに対する自分の考えを言葉にするという活動を行う。それぞれが探し当てたテキストを持ち寄ることで、自身にない視点が得られ、また、次の課題設定につながっている。

4.3 情報活用能力の育成

授業においてICT機器を活用している。ただし、単に視覚情報を与えるというのではなく、自ら課題設定に取り組み、問題解決につながるような授業づくりに努めている。また、受講者にもICTの活用を促し、フィードバックを行いながら問題提起を行う。次の課題設定と解決につながるような取り組みとなっている。

5. 教育改善のための努力

学期ごとの授業評価アンケートの結果を踏まえ、高評価の点は継続しながら、指摘の多かったところを改善していく。また、授業ごとや、学期の中間に受講者からのフィードバックを求め、受講の学生に還元できるように努めたい。

5.1. 改善努力1 授業評価アンケートと授業改善報告書

5.2. 改善努力2

6. 教育の成果・評価

7. 今後の教育に関する課題と目標

8. 参考資料

(1) 担当科目シラバス

(2) 授業評価アンケート結果